



【特集】

ビブリオバトルをはじめませんか？

皆さんは、「ビブリオバトル」という言葉を耳にしたことはありますか？

最近は新聞やテレビなど、多方面で取り上げられるようになってきたため、ご存じの方もいらっしゃると思います。このビブリオバトルは「書物」をあらわす「biblio（ビブリオ）」と、「戦う」ことをあらわす「battle（バトル）」を組み合わせた日本で生まれた造語です。

このビブリオバトルには「知的書評合戦」という冠がついており、その名の通り「本の素晴らしさを書評で競う」あたらしい本の楽しみ方のひとつとして、いま少しずつ全国に広まりを見せているところです。



岩手県立図書館のビブリオバトル

知的書評合戦 ビブリオバトル

(ロゴ：公式サイト <http://www.bibliobattle.jp> より)

今まで読書というものは、一人で楽しむことが多いものだったと思います。ですが、本を読んだあと感想を話したり、身近な誰かに薦められたくなったという経験は誰しもあるのではないのでしょうか。

このように一人で楽しんでいた「読書」を、「バトル」と呼ばれる発表者が「オーディエンス」と呼ぶ観覧者へ向けにお薦めする本を紹介することで、たくさんの人が「読書活動」を共有し、気軽に楽しめるようにしたい。そのような理想のもと2007年京都大学情報学研究所共生システム論研究室の谷口忠大氏によって考案されたのが、本を知るためのコミュニケーションゲームである「ビブリオバトル」です。

ビブリオバトルのやり方



(図：公式サイト <http://www.bibliobattle.jp> より)

ビブリオバトルの公式ルール上では、参加対象、および紹介する本のジャンルは特に設定されていません。

基本的に誰でも参加できるため、公共図書館での開催のほか、いまでは学校の授業で取り入れたり、読書会のなかで開催されたりすることもあります。自在に参加要項を設定できることも、ビブリオバトルの特徴のひとつです。友人同士が3人以上集まれば、その場ですぐはじめられる本の紹介ゲームは、まさにこれまでにない本の楽しみ方といえるのではないのでしょうか。

ビブリオバトル公式ルール

1. 各発表参加者が自分で読んで面白かった本を持ってきて集まる。

- ・他人が推薦したものでもかまわないが、必ず発表者自身が選ぶこと。
- ・それぞれの開催でテーマを設定することは問題ない。

2. 順番に一人5分でカウントダウンタイマーをまわしながら本を紹介する。5分が過ぎた時点でタイムアップとし発表を終了する。

- ・原則レジュメやプレゼン資料の配布等はせず、できるだけライブ感をもって発表する。
- ・発表者は必ず5分間を使い切る。

3. 紹介された本について2～3分のディスカッションを行う。

- ・発表内容の揚げ足をとったり、批判をするようなことはせず、発表内容でわからなかった点の追加説明や、「どの本を一番読みたくなったか？」の判断を後でするための材料をきく。
- ・全参加者がその場が楽しい場となるように配慮する。
- ・質問応答が途中の場合などに関しては、ディスカッションの時間を多少延長しても構わないが、当初の制限時間を大幅に超えないように運営すること。

4. 全発表参加者に紹介された本の中で「どの本を一番読みたくなったか？」を基準に参加者全員で投票を行い、最多票を集めたものをチャンプ本として決定する。

- ・紳士協定として、自分の紹介した本には投票せず、紹介者も他の発表者の本に投票する。
- ・チャンプ本は参加者全員の投票で民主的に決定され、教員や司会者、審査員といった少数権力者により決定されてはならない。
- ・参加者は発表参加者、聴講参加者よりなる。全参加者という場合にはこれらすべてを指す。

岩手県立図書館の取り組みについて

利用者参加型イベントであるビブリオバトルは、「利用者も主体的に参加できる」イベントとして当館では力を入れているもので、2013年の「第67回 読書週間」から開催しています。



会場案内板

開催当初は県内における認知度が低かったビブリオバトルですが、2014年秋の読書週間では地元の新聞で特集記事として取り上げられるなど、当館利用者や県民にアピールする機会も増え、注目度も高まってきているように感じます。

今年2月には当館の「子どもとしゃかんフェスティバル」にあわせて、初めて子どもも参加した「ミニ・ビブリオバトル」を開催しました。

最近では岩手県内の図書館からビブリオバトルを開催するという情報を少しずつ耳にするようになり、とても嬉しく感じています。

ビブリオバトルの開催状況

第1回目のビブリオバトルは、2013年11月

の土曜日の夕方に行いました。時間は30分程度でバトラー(発表者)は5名を定員としました。会場は来館者の利用環境を配慮し、普段映画会や講演会に利用しているミニシアター(定員73名)で行いました。バトラーは募集開始と同時に申し込みがあり、ビブリオバトルに興味を持つ利用者層が潜在することを主催者側が把握でき、幸先の良いスタートとなったことを覚えています。

第2回は同じ月に再度開催しました。前回は夕方でしたが、実験的に祝日の日中開催とし、時間等の変更を通してバトラーやオーディエンスの反応を見ることも目的のひとつとしていました。

この後、第3回を2014年1月に、第4回のビブリオバトルは5月に、第5回は「第68回 読書週間」にあわせて同年11月に開催し、この回で開催1周年となりました。

また、第2回開催からはバトラーの定員5名は変更せずに、多くの方に参加していただきやすい1時間程度の開催時間としています。

この他、中・高生の体験学習のプログラムにビブリオバトルを取り入れたりしながら、ビブリオバトルが年齢層を問わず、広く認知されるように、当館では日々努めているところです。



バトラーの発表

2014年5月の第4回開催の直前には、地域のブックイベントと連携して、盛岡駅ビルでビブリオバトルを行っています。図書館を出て、多

様性のある駅ビルでの開催は初めての試みでしたが、終了時には継続開催を要望する声などもあり、たいへん活気のあるイベントとなりました。後日には、イベントを見たという方から問い合わせ等もいただいております、図書館の中でビブリオバトルを行うと同時に、図書館外で開催することの意義も、現在強く感じているところです。



盛岡駅ビルでのビブリオバトル

利用者参加型というイベントの魅力

ビブリオバトル終了後、いずれの会も観覧者からは「思っていたよりずっと面白かった」、「次回は友人を連れてきたい」など、好意的な意見を多くいただいております。また、バトラー自身からも「いろいろな人と本について意見を交わした時間が貴重だった」、「他人からおすすめ本を教えてもらう機会はなかなかないので、勉強になる」という声をよくお聴きします。

今年の2月22日に開催したミニ・ビブリオバトルでは本の紹介時間を5分から3分に短縮し、ミニシアターという閉鎖された会場ではなく児童コーナーの一角、児童図書研究室というどなたでも自由に入出入りできる解放された会場で、事前申し込み無しで行いました。子どもの部で発表した小学6年生の女の子3人は、大人の部を見ていて興味を抱いた様子だったので「みんなも参加しませんか」と声をかけたところ、す

ぐ書架に行って紹介する本を選んできて素晴らしい発表をしてくれました。

「はじめはどういうゲームか知らなかったが楽しかった」「友達と日常的にお薦め本を紹介し合っているの、こういうイベントは面白い」等の感想を伺うことができました。



ミニ・ビブリオバトル

読書には基本的に「読み手」と「本」との関係しかないものですが、ビブリオバトルを通して、そこに他者とのコミュニケーションが生まれることは、とても興味深いことだと思います。本を紹介し合うことにより、読書という体験が受け身ではなく共感を伴うものとなり、『本を通して人を知る、人を通して本を知る』というビブリオバトルのキャッチフレーズの通りに、本好きにとってより関心を広げる魅力的なプロセスとなり得るのではないのでしょうか。



ビブリオバトルで紹介した本

花巻市立東和図書館

ビブリオバトルを始めませんか！

最近、テレビやラジオで「ビブリオバトル」や「ブックレビュー」を見聞きすることが多くなり、その熱戦ぶりが好評なので、当館でも取り組んでみようと思いました。

ゲーム感覚で本との出会いを楽しみ、伝える喜びを体感することで、「書評合戦」という「戦い」のイメージより「新たな本との出会いの演出」に期待したものでした。そこで、岩手の読書週間（2/1～14）関連行事として、「ビブリオバトル」を図書館ならではの“人を通して本を知る。本を通して人を知る”機会として実施することとしました。

募集・広報

一般に発表者を募集したのですが応募者は1名のみ。そこで、平成26年度全国高校生童話大賞で金の星賞を射止めた生徒が在籍する花巻北高等学校と富士大学へ学生発表者の推薦を依頼したところ、それぞれ2名ずつ4名の参加がありました。ほかに心当たりで直接交渉し3名を確保しました。結果として10代から60代までの男女8名の参加者となりました。

花巻地区では初の試みということで、特にジャンルやテーマは設定しませんでしたので今回は文学に偏っていましたが、各発表者が“これぞ、私のおすすめの1冊！”を熱く語ってもらいました。同じ文学の分野ながら幅広い本の紹介となり、観戦者も大いに楽しんだようでした。

広報については、花巻市広報紙に掲載するとともに、「やってみよう！ビブリオバトル」のポスターやチラシを作成し、市内の各図書館や振興センター・富士大学・高等学校等へ配布し、周知を依頼しました。また東和地区内有線放送や「えふえむ花巻」でも広報しました。

岩手の読書週間関連企画事業

やってみよう！ ビブリオバトル

？ ビブリオバトルとは、「本の紹介コミュニケーションゲーム」です？

★ビブリオバトルの公式ルール★

- ①発表参加者が読んでおもしろいと思った本を持って集まる
- ②順番に一人5分間で本を紹介する。
- ③それぞれの発表のあとに、参加者全員で、その発表に関するディスカッション（感想や質問）を2～3分おこなう。
- ④すべての発表が終了したあとに「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を、参加者全員1票でおこなう。最多票を獲得したものを「チャンプ本」とする。



大好きな一冊を紹介しよう！

いつ？ 平成27年2月22日（日） 午前10時から11時30分
どこで？ 花巻市立東和図書館（閲覧スペース）
対象・定員は？ バトルに参加できるのは、高校生以上で定員8名（先着）です。
※バトルの観戦は申し込み不要で、何人でもOKです。
バトルに必要なものは？ 自分が紹介したい「おすすめの本」1冊
講師・進行役は？ 富士大学 教授 早川 光彦 氏
＜早川先生のプロフィール＞
・岩手県山形市出身、花巻市在住
・川崎村立図書館（現一関市立川崎図書館）の主任司書として設立に携わり、2004年からは、南相馬市立中央図書館の館長に就任され、のちに副館長として登壇。2011年の東日本大震災後継続。
・2014年から退職

お申し込み・お問い合わせ 平成27年2月18日（水）までに、電話またはファクシミリで
花巻市立東和図書館 TEL.0196-42-3202 FAX.0196-42-3208 まで。

ポスター・チラシ

日程

指導・司会進行を富士大学の早川教授にお引き受けいただくことにより、準備段階から円滑な事業運営をすることができました。また会場を開架スペース内に特設したことで、立ち止まって聞き入ったりする利用者もあり、様々な広報活動に繋がったと感じました。

- 9:30 お気に入りの本を持って集合。
発表順決定、進行打ち合わせ。
- 10:00 開会、ルール説明
- 10:10 順番に「お勧めの1冊」を紹介。
一人の持ち時間は5分以内。
- 10:50 参加者全員で、発表に関するディスカッション。一人に3分程度。
- 11:15 「どの本が一番読みたくなったか？」各自1票ずつ投票（発表者と観戦者全員）。
最多票獲得を「チャンプ本」とする。
- 11:30 講評、閉会



バトラーの発表



バトラーの発表

参加者アンケートの結果（発表者と観戦者）

年齢	10代：4人、20代：3人、30代：2人、 40代：2人、50代：8人、60代：4人、 70代：1人、無回答：1人
性別	男性：6人、女性：21人、無回答：1人
住所	花巻：12人、東和：7人、花巻市外：5人 無回答：1人

感想や意見の抜粋

- ・高校に入ってから、ほとんど本を読む機会がなかったので、ビブリオバトルで「読みたい」と思う本ができたと思いました。また行ってほしいです。
- ・自分で初めて参加し思い入れのある本を紹介でき、また参加者のお気に入りなどを知る良い機会になった。
- ・部誌を販売しながら応援していたのですが、図書館全体に聞こえた方が他の方が興味を持つのではないかと思いました。読んでみたい本が一つにはしぼれなかったくらいとても良いバトルだったと思います。
- ・「どの本と、いつ出会うか」という言葉が印象的だった。本好きな方の「熱さ」に圧倒された。新たな発表者になりうると思った。
- ・本が好きな皆さんの「行動力」に、心地よいインパクトをいただきました。本と愛読者の皆さんとの有意義な出会いのひとつに感謝します。
- ・ジャンルの偏りがあった気がするので、もっと広げて頂ければと思いました。高校生、大学生の発表良かったです！
- ・楽しい時間をありがとうございました。
- ・本の紹介の仕方が参考になった。書店員が本を紹介するようだった。
- ・なにげなく手に取った本から楽しさを感じ取れるという「図書館に行こう」というコンセプトが一番合っていたのが⑦番「タルト・タタンの夢」かなと思いました。最近の流行の

投票結果

紹介した本	得票数
破れた繭一耳の物語 1	3 票
夜と陽炎一耳の物語 2	
天を衝く	2 票
ハッピーバースデー 命 かがやく瞬間(とき)	1 票
夜と霧	3 票
RDG レッドデータガール	2 票
木暮荘物語	4 票
チャンプ本	11 票
タルト・タタンの夢	
月の影、影の海（上・下）	1 票

ビブリオバトルを意欲的に取り入れた東和図書館に拍手です！

- ・発表者と応援席の質問対応が面白い。ポイント制(一人持ち点3点として、加減して投票する)にした方が良いのでは？席の配置を半円形型にすると親近感が増すかも。

終了後の意見交換会

発表者から

「次回はもっと上手く話したい」「緊張したけど楽しかった」「どう話せばこの本の魅力を伝えられるかと、かなり工夫した」「人と人、言葉と言葉とでしか伝えられない、人肌の温もりを感じるような発表を心掛けた」など、自身の感動を他者に伝える快感が好評でした。

観戦者から

「私だったら手に取らない本だけど、熱く紹介されると読まずにいられなくなる」「観戦者と発表者の意見交換で“読みたい！”が増幅した」「1冊に絞れず、チャンプ本選びは迷った」「若者たちの巧みな表現力はすばらしい」「いい本と素晴らしい紹介者に出会えて良かった！」「次は私も発表したい」など次回開催を期待する声が多く寄せられました。

早川先生の講評から

- ・発表者を義理や無理強いで依頼することの無いよう、日ごろから図書館は利用者との良好なコミュニケーションをとり、信頼関係を築いてほしい。
- ・今回はジャンルが文学に偏ってしまった。バランスに配慮した誘導があってもよいだろう。また絵本・写真集や図鑑、実用書や地元の特徴ある産業、郷土史なども面白いのでは？
- ・発表者がより効果的に選択するためには、図書館の文学以外の蔵書の魅力づくりが問われ

ます。

- ・発表者の紹介本お勧めコメントは重要。バトル本紹介コーナーの開設やコメントを掲示して貸出をするなど、次につながる工夫を考えましょう。この機を逃す手はない！

課題・今後の展開等

- ・タイムキーパーや紹介コメント、開票速報の掲示、紹介本の展示など、スタッフがある程度必要なことがわかりました。今回はボランティアの皆さんに助けられました。
- ・終了後の意見交換は大変活発で、次回に期待する声が多く寄せられました。
- ・新刊や人気の本に関心が集まりがちな風潮ですが、愛読家は紹介本を自分の中に蓄積していると感じました。ビブリオバトルによって、図書館ならではの所蔵資料にスポットを当て、長く愛読される資料発掘の機会とするなど、図書館本来の役割の一端を再認識しました。
- ・「ビブリオバトル、たのしい！」の熱が冷めないうちに、今後の企画を検討したいと考えています。また図書館の主催事業を待つまでもなく、利用者有志が気軽に集まって書評交換できるような場と継続可能な機会の設定も、併せて仕掛けていきたいと思っています。



ビブリオバトル紹介本コーナー

岩手県立大学 「学生と本をつなぐ」ビブリオバトル

きっかけ

岩手県立大学メディアセンター（図書館）では、平成25年7月に初めてビブリオバトルを開催しました。きっかけとなったのは、平成24年度から3カ年計画で実施している「学生の学びのためのラーニング・コモンズ整備」の取り組みです。この取り組みは、本やインターネットから得られる情報を活用しながら、論文作成やディスカッション等のアクティブラーニングができる空間の整備と、情報活用等を支援する人の配置からなり、学生の図書館利用促進や課外における自学自習支援を目的としています。この取り組みにより、これまで静かに学習する場であった図書館が、学生同士の交流の場としても活用されるようになりました。

「好きな本を持ってきて紹介しあい、どの本が一番よみたくなったかを決める」ビブリオバトルは、新しく整備した学習空間を活用しながらPRできるほか、学生が本に親しむ機会ともなり、学生の図書館利用（課外における自学自習）を促進するために有用なイベントであると考え、これまで4回開催しています。



バトルの発表

開催する前は、参加者が集まるかどうかなど不安もありましたが、シンプルかつ学生が興味を持ちやすいルールであることやプレゼンテーションの練習に適していることなどにより、学

生にとっては親しみやすいイベントであったようです。



ビブリオバトル紹介本コーナー

開催場所としての多目的スペース 「風のモント」

平成26年度、図書館では2回のビブリオバトルを企画し、その開催場所として「学生の学びのためのラーニング・コモンズ整備」の取り組みの一つとして、この7月に整備した多目的スペース「風のモント」で行いました。

「風のモント」は、学生目線で図書館サービスを改善し、企画展示や利用案内等の活動を通して、図書館利用促進を図る学生ボランティア「ライブラリー・アテンダント」（平成26年度は24名の学生が活動）のアイデアにより、学生が意欲を持って集い交流する場となるよう、学生歌のタイトルをスペースの名称としたもので、就職相談や学習相談が受けられるほか、会話や飲食をしながら学習できるスペースです。

図書館に隣接したこのスペースは、ガラス張りで開放感があり、図書館より長時間開放しているため、学生から人気の場所となっています。個人で熱心に学習する姿や、可動式の机やホワイトボードを活用してグループワークをする姿が見られ、学生同士がお互いに刺激しあう相乗効果にも期待しています。ビブリオバトル開催時にも、居合わせた学生が観戦するなど、より気軽な参加を促すことができました。



多目的スペース「風のモント」



手書きの看板で開催をPR

課題と今後の展開

本学におけるビブリオバトルの開催を振り返ると、プレゼンテーションがいかに優れているかよりも、紹介する本に対する想いの強さがチャンプ本を決定する鍵となっており、このことがビブリオバトルの魅力の一つであるように感じます。

その一方で、回を重ねるごとに学生のプレゼンテーションスキルが向上することで、プレゼンに自信のない新たな学生の参加を躊躇させる一因ともなっているようです。

本来ビブリオバトルは、ゲーム感覚で気軽に楽しみ、小さなコミュニティで日常的に行われることが理想です。今後は、ルール説明や場所の提供、バトルテーマの工夫などにより、気軽な参加を促すことで、本学にあった形での「学生と本をつなぐ」イベントへ発展させていきたいと考えています。

～参加学生の感想～

ビブリオバトルに参加するにあたって、その本をより読み込むことで新しい魅力を発見したり、やっぱりいい本だなと感じたりすることができました。また、他の人の発表で、新しいジャンル、新しい本との出会いがあることも大きな魅力だと思います。文章の要約、魅力の発見といったことだけではなく、どう発表すれば観客が興味を持つのかといったプレゼン能力も必要となってくるものなので、新しい学びや交流の場としてより浸透して行って欲しいです。

(総合政策学部4年 一井七海さん)

ビブリオバトルとは、どのようなジャンルの本でも、どのような発表のスタイルでも相手に思いを伝えることができる“遊び”であると感じました。遊びであるからこそ、誰でも気軽にチャレンジできること、それが一番の魅力です。

(総合政策学部4年 砂田量子さん)

ビブリオバトルの魅力は、おすすめしたい本が一冊でもあれば誰でも参加できることです。確かにプレゼンテーション能力に自信のない人は、参加に尻込みするかもしれませんが、しかし、参加した人は、自分が面白いと思った本を紹介できた喜びと達成感でいっぱいになるはずですよ。より多くの学生がビブリオバトルに参加したいと思えるように、ライブラリー・アテンダントとしてさまざまな環境づくりをしていきたいと考えています。

(ソフトウェア情報学部4年 藤原朱里さん)